

近代における日・朝漢学者の交流と影響

朴 暎 美

一 はじめに

韓国は三国時代に漢字を受け入れて以来、長い間漢字を使用していた。朝鮮時代に世宗大王がハングルを発明してからも、漢字は使われ続けた。下層民と女性はハングルを使用した。支配階層と士大夫は漢字を使用した。また、支配階層と士大夫は漢字を「真書」と呼んだが、このような名称は漢字で書いた「文（文書、文学などすべての記録物）」のみが「ほんもの」であるという意味であった。

「真文」とは、そのような意識が形象化されたものである。朝鮮時代の士大夫が「真文」＝漢字で形象化したものは、中国がアジアの文明国であり覇権国という考え、つまり「中華」の空間の中であった。そのなかには、また中国は文明の施恵者として、朝鮮はその施恵を受ける唯一の国であるという認識があった。中国文明の施恵の中で、漢字を通じて文明を受け入れ、それを土台として文物と文化を発展させてきたという自負心、所謂「小中華意識」は朝鮮士大夫のアイデンティティーの一つであった。

近代期に入って、朝鮮は、明治維新以後、欧米文明をうけいれ文明国の隊列に入った日本を目睹した。それにより以前か

らもつていた伝統的日本蔑視観を変えなければならなかった。朝鮮は西洋の植民地拡張政策の中で生き残るためには変化すべきであると覚醒した。すなわち、政治、社会、教育など国家全体を変えなければならなかった。朝鮮にとっては、先発国である日本が行った明治維新が朝鮮の改革のモデルになった。特に、物質文明における目覚ましい発展は、朝鮮の進歩勢力を魅了させるのに十分だった。いまや朝鮮は「中国に学ぼう」という主張から「日本に学ぼう」という主張へ変わり始めていた。

近代に朝鮮の自主国家を建設しようとした人々の中には、日本をモデルとしようとした人々がでてきた。その中で、朝鮮の漢学知識人は、文明国、主権国を目指し、デモクラシーを成し遂げるため、日本との交流を通じて先進の文化を受け入れようとした。当時の朝鮮の漢学知識人は朝鮮の支配階級であり、朱子学を信奉しながら華夷論的な世界観をもっていた存在であった。このような、彼らの対日観の変化は、また新しい朝・日関係を求めた。日本でも、中国を中心した華夷的な秩序から脱した新しい国際関係、つまり万国公法に基づいた関係を、朝鮮と結ぼうとした。双方の要求に相応しく、方法を模索するための様々な動きが始った。本研究はこの動きの一つとして朝・日「交流」に注目した。

「交流」というのは新しい世界に接することと言える。近代初頭朝鮮人にとって発見された日本は、明治維新を通じて換骨奪胎して、「文明の国」になったので、彼ら朝鮮人の持論を覆すほどの衝撃を受けた。その結果朝鮮人には、西欧の侵略に對抗して白人種と競い出すほどに発達した文明を持った日本、進歩的な政治制度を取り揃えた日本は、警戒の対象であり、同時に羨望の対象にもなった。

本研究はまず、朝鮮が日本に文明を伝えるという優位的な立場から、文明国として日本を認識しつつ、「学日」文明国日本を学ぼう」の思考へと変わり始める時期までを研究の対象とする。

本研究は、朝鮮と日本の漢学者が互いに交流して影響をしたことに関する研究で、主に旅行・使節団来日時の著作及び朝鮮に輸入された日本側文献を対象とした。そのために朝鮮と日本の多様な文献と人的交流及びその過程について考察し、こ

れによって朝鮮と日本との近代をめぐる様々な言説を明らかにする。

さらに、朝鮮と日本の交流を通して「植民言説」が伝播されたという仮説を証明した。また、日本の植民言説の土台である明治儒学の様相を究明しようとした。明治維新のイデオロギーである明治儒学が、「アジア」をめぐる三国連帯、同種同文論を主なキーワードとして、日本の近代化だけではなく東アジアの近代化とも密接な関係を持つことを究明しようとするものである。

二 「同文」と「善隣」という言説

朝鮮と日本、そして中国は長い間漢字を媒介として言語生活を共有して来た。近代的社会への変革は漢字が支配した東アジアの秩序を崩すことから出発したと言っても過言ではない。漢字すなわち儒学の言語である漢字から脱することは、中華的秩序との断絶を、そして新しいアイデンティティを捜すための第一歩を意味するものだった。しかし実際にはそんなに簡単なことではなかった。新しい政治環境が形成されて、社会が急いで西欧化を目指して改革を行っても、言語環境は変わっていないかった。当時の日本を例として近代期アジアにおける漢字の位置を吟味して見よう。

明治維新と言えば「文明開化」と同義語のように思われ、旧時代の学問の中心であった漢文は一斉に退潮したと考えられがちであるが、事実はそうではない。すなわち維新政府の頭官たちは、それぞれ各地の藩閥で漢学修行をしてきたエリートたちである。したがって彼らの価値観の根底には旧漢学の教養が厳然として存在し、それについての強烈な愛着がまつわりついていた。そこで新時代になったとは言え、彼らは「漢語」を使って文章を作らせれば漢文調であった。明治の初年のもっぱら漢文や漢文直訳が流行した。また全国諸藩の人々は、互いに交通し会合する必要があった。

しかし各国にはそれぞれの方言があつて、話す言葉が理解できず、非常に会話の障害となつた。そこで漢語が流行つてそして維新以降にはこれらの人々が多く要路にたつたため、ついに漢語が上流社会の言葉となつたのである。⁽¹⁾

日本の言語環境と同じように、朝鮮においても漢字は書き言葉と教養の言語であつた。当時東アジアの国際情勢の中から漢字の位置を見てみよう。ロシアの南下及びイギリスの中国侵略などから可視化された西洋の侵略に対する朝・中・日の危機感に対しても注目しなければならない。西洋列強の侵略により崩れていく中国。明治維新の混乱の中にあつた日本。そして「衛正斥邪」的立場で鎖国した朝鮮。それぞれ相異なつた状況にあつた三国を、一つに集結させることが可能だつたのも、漢字により言語生活がまだ有効だつたからである。漢字は話し言葉には使用不可能だったが、長い間占めてきた書き言葉の地位は健在であつた。たとえ後に朝鮮と日本で漢字廃止論が沸き上がつてもこの地位を譲ることはなかつた。

東アジアの書き言葉として、漢字の位置と役割は「同文論」ということでよく現わされている。「同文」には久しく朝・中・日が漢字を媒介しての共同体意識が含まれている。⁽²⁾

しかし近代期の同文論は、中国から日本に発話者が変わったという点で、伝統的なこととは異なつた。これに対して、さらに具体的に明らかにしよう。

一つ目は、「同文」は「同教同文」であることである。日本発によると、東アジアは、漢字という言語によって形成された共同体論を越え、「儒教」という思想の共同体論が主張された。

次は一八八一年三島中洲が朝鮮朝士視察団の一員だつた巖世永と崔成大に与えた漢詩である。この詩を読みながら同文論に対する考え方を見てみよう。

同教同文情好親。

相逢似異邦人。

檀君開国国源遠。

箕氏化民俗醇。

探水討山経万里。

觀風察政滞三旬。

一朝送別尤惆悵。

再会難期海外賓。⁽³⁾



(4) 三島中洲（一八三一年一月二三日―一九一九年五月二二日）は、漢学者、東京高等師範学校教授、新治裁判所長、大審院判事、東京帝国大学教授、東京御用掛、宮中顧問官、二松學舎大学の前身となる漢学塾二松學舎の創立者である。重野安繹、川田甕江とともに明治の三大文宗の一人に数えられる。本名は毅で、字は遠叔、通称貞一郎、中洲は号である。一八七七年九月に中村敬宇、重野安繹、川田甕江、鷲津毅堂、阪谷朗廬、川北梅山、南摩綱紀らと邸内に経国文社を興す。そして翌月、一八七七年一〇月一〇日、四八歳のとき、漢学塾二松學舎を創立した。一八七八年一月東京高等師範学校の漢学教授となる。一八九九年三月、文学博士の学位を受ける。一九一二年八月、東宮侍講を辞し、宮内省御用掛を拝命する。

上の詩は、三島中洲が、嚴世永と崔成大が帰国する際、餞別として書いたものである。ここで彼が言った「同文同教」ということは、朝鮮と日本が漢字文化圏だけではなく、同教、すなわち儒教の文化圏の一員であるという意味も含まれていた。

「同種同文論」が黄人種の漢字文化圏ということに比べて、「同文同教論」は儒教文化圏という意味が強い。金允植が三島中洲に唱和した詩でも、そのような意識を再び確認することができる。

地異文相同。 事竊変則通。

大功須歲計。吾道貴時中⁽⁵⁾。

金允植にとって日本は、「地異文相同」かつ「吾道」の国であって、三島中洲にとって朝鮮は、「同教」の国であった。



金允植（キム・ユンシク、一八三五年—一九二二年）は、一九世紀から二〇世紀前半にかけての、朝鮮の政治家・思想家である。本貫は清風金氏、字は洵卿、号は雲養で、文集に『雲養集』、『天津談草』、『陰晴史』、『壬甲零稿』などがある。甲申政変の時に袁世凱の援軍で開化派を排除した。甲午改革の金弘集内閣の外務大臣であった。一八九六年露館播遷の時に乙未事変を座視したという理由で済州島に配せられたが一九〇七年赦免を受けた。日本から子爵（朝鮮貴族）を授けられるが、3・1独立運動の時に韓国独立請願書を日本政府と朝鮮総督府に提出して、弾圧後に幽閉、爵位を剥奪された。一九一五年經学院大提学になり、学士院賞を与えられた。

(6)

上のように同文論は漢字を言語として見る段階を越えて、儒教文化圏という概念に包含された。儒学者である金允植と三島中洲の間に、これほど共通した意識が持たれる理由は、西欧化の脅威にされた儒教、すなわち東洋精神にたいする脅威に互いが深く共鳴したからだと考えられる。

二つ目は、日本発「同文論」はアジア連帯主義の線上から出たということである。では、日本発「同文論」の特徴は何か。それは同文の国家である朝鮮と日本、そして中国が連帯して、西欧すなわち「異種異文」の侵略に抵抗しなければならぬというのである。しかし朝鮮が内憂外患の危機にあるにせよ、日本との連帯を選択するまでには、外交的な葛藤をめぐるさまざまな問題があった。例えば朝鮮にとって特に、日本が壬辰年（一五九二年）に朝鮮を侵略した過去と、強制的に江

華島条約を締結した当時（一八七五年）がそれである。

朝・日間の連帯のためにはそのような問題から脱しなければならなかった。三島中洲が一八八〇年、第2次修信使であった金弘集に送った漢詩には、過去の朝・日関係に対する批判と、そして互いに連帯をしなければならない理由を次のように唱えた。

晋秦構難非今日。韓魏連和是此時。

紛紜既往鬪牆事。付与吟筵酒一卮。⁽⁷⁾

彼は過去朝鮮と日本の争いはあったが、それは「鬪牆事」すなわち、兄弟間の争いのようなことで、昔のことと見たのである。また彼は「紅塵四隣暗」⁽⁸⁾のような絶体絶命の状況で、東アジアが生き残るためには、合従連衡をすべし、そのような連帯が成し遂げられれば、ようやく「東洋波浪穩」になると言った。

以上のように、歴史上で同文論は、漢字を書き言葉としてコミュニケーションを形成し、漢字文化圏の中での疎通によって、アジアの連帯を企てる言説である。コミュニケーションの場合、直接対面の時は、筆談、漢詩のやり取りなどのかたちがあり、間接的には、知識の流通、漢字で著作された刷り物によって知識を流通させる方法があった。一八八一年朝鮮朝土視察団が日本を訪れた折、収集した資料を漢字者たちに漢訳を依頼した⁽⁹⁾ことはそのような例の一つである。

そして、このような日本発同文論が目指していたのは、アジアの連帯であった。朝鮮・中国・日本の諸国はアジア連帯主義の実現を理想にし、明白な対西洋戦線を引こうとした。

しかしながら、これら三国が、東アジアに占めていた力学関係に照らしてみると、この理想は実現できなかった。日本は、朝鮮と中国に対して武力で脅かし、強制的に条約を締結するとか、侵略と挑発行為をしたことにより、日本とは、同士

とはならなかった。

一八七六年、朴珪寿に代わって書いた姜璋の次の文は、朝・中・日が互いに「信頼することができない」とする姿勢を示している一例である。

下示日本領事初入中国。請開館交市定條約時。有勿侵属国一條。今彼之遣使中国。稱以修好朝鮮云者。以其曾有条約也。故自明此举之爲修好。而其意万一不如意。而至於動兵。則亦欲發明於中国曰。朝鮮先失。故不獲已而至於用兵。非日本之違約於中国也。其意必如此。然則我不先動。彼雖以兵船恐喝。必不至於先發加兵矣。此一段教意。誠是今日日本称兵之肯綮也。亦今日処事之機要也。今按大清政府。復日本政府書云。貴大臣推念中国和好之情。詳述用意。無非信守我兩國条規。敦睦不渝。又曰。日前貴大臣晤称弁事。固要照約。此一條語。即指年前条約而云然也。¹⁰⁾

上記によると、朝・中・日間は条約を結んで互いに侵略しないことにしたが、もし自国の目論見が外れた場合には、「違約」を言いがかりにして相手の国に兵力を出動させたりした。

以此觀之。彼情雖極叵測。亦顧畏条約。我不先失。則彼亦不敢輕動。今日所恃而從事者。惟此一段而已。捨此則頃刻激變。無可爲者矣。日本政府所云。窃祈朝鮮国以礼接我使臣。不拒我所求。以能永保平和也。若不然而事遂至敗。則韓人自取不測之禍必矣。此一段。不可專帰之恐嚇語。誠亦日本称兵之骨子語也。曰。不拒我所求。其所求者何事也。若知其所求之事而聽從。則必不動兵。不爲聽施。則必然動兵。此今日事機。必至之勢也。然則今日之事。宜決於此。而彼之所求。若係難從之請。則此当奈何乎。¹¹⁾

⑭



日本は朝鮮に、自分たちの要求を聞き入れたら平和を永遠に保障してやるが、そうでなければ、不祥事が突発すると脅した。けれども、日本が朝鮮に要求することは、朝鮮側が聞き入れにくいことであった。果たして日本に対抗したとたん、日本は軍隊を出動させた。

強制的な条約の取り結びにより、同文論の虚像が崩れた。その瞬間、同文圏というのは「想像の共同体」で、実体もなにもないことに気付かなければならなかった。もちろんアジア連帯も同じであった。それにもかかわらず、次々に朝・日関係は同文の国で、そして善隣の国であるとして、アジア連帯は形骸化された。東アジアに近代以前までは、中華主義に根ざした中国発「同文論」がその場所を占めていたが、近代には日本の膨脹政策に根ざした日本発「同文論」に変わってきた。^⑬

このような日本発「同文論」に対する受信者として、朝鮮の反応はどうであったのか。朝鮮にアジア連帯を主な内容とする黄遵憲の『朝鮮策略』が伝わって、朝鮮の開化勢力に大きな衝撃を与えた。黄遵憲は興亜会のメンバーで、アジアの諸国が日本を中心に連帯しなければならないという持論をもっていた。

一八八〇年修信使の一員である朝鮮の開化思想家、姜璋（一八二〇—一八八四）が興亜会に参加し、また一八八一年朝鮮

末松謙澄（一八五五—一九二〇）は明治・大正時代の政治家。名は正式には「のりずみ」と読む。号は青萍。東京日日新聞社に入社して文才を発揮。伊藤博文に認められて官途についた。一八七八年駐英公使館書記生見習として渡英し、翌年ケンブリッジ大学に入学。文学・語学・法学を修め、滯英中『源氏物語』（抄）を英訳刊行した。一八八六年帰国後、内務・文部両省に勤め、一八八九年には伊藤の長女と結婚。第1回衆議院議員選挙以来、3回連続当選し、一八九六年からは貴族院に転じた。一八九二年以後、第二、四次の各伊藤内閣で法制局長官・通信大臣・内務大臣を歴任。一九〇七年子爵。演劇改良会の設立、イギリスの女流作家バーサ・M・クレイの小説『谷間の姫百合』やイギリス人アンデルの『日本美術全書』の翻訳、『防長回天史』の編纂など、幅広い活動でも知られる。

朝士視察団が興亜会も訪問するほど、興亜会に対する関心が高かった。『興亜会報告』¹³には、一八八〇年から一八八六年までにかけて朝鮮人の参加と活動に関してその報告が記されている。

たしかに、朝鮮はある程度には、アジア連帯論に国運をかけていたといえる。それから、朝鮮は開港以降、開化の準備をするため、日本に公式的な使節団を4回、また非公式的な使節団も派遣した。しかし、日本の植民政策は東アジアの浪漫的な夢を再び崩してしまった。そのかわり、朝・日は「内鮮一体」という新しい関係を作りはじめた。植民地初期、日本側で注目される人物には末松謙澄がいた。

彼は一八七六年江華島条約で朝鮮を訪問して朝鮮人と付き合った¹⁵。一九〇五年以後には、朝鮮人の訪日時、彼の家である芝城山館で大規模な宴会を開催したりした。当時、大勢の朝鮮と日本の顯官及び漢字者たちが参加して、多数の漢詩を唱和したが、後に『善隣唱和』1（一九〇八）・2（一九〇八）と『納涼唱和集』（一九〇八）¹⁶、『輕妙唱和集』（一九〇八）¹⁷が出版された。末松に対する朝鮮人の思いは、一九〇九年觀光団の一員として来日した鄭万朝の詩に残っている。

望公嘗若古人然。得読篇章頼阿連。

（去年家季來遊多得詩文而歸）

脣齒相依修旧好。心肝一泻話新縁。

古文政値今昭代。左海曾与此盛筵。

会见兮衣爭繡句。鷄林千載永流传。²⁰

鄭万朝は彼の弟鄭丙朝を通じて末松についてすでに知っていたし、特に、朝鮮側に彼は詩人として認識されていたことはとてもおもしろい。末松の上記の著作から見て、日本が朝鮮を「兄弟国」と呼名したが、その一方では、一九〇八年に朝鮮

人は、日本との関係に対して「同文国」・「善隣国」から、「兄弟国」として認識するほどに至ったことが分かる。例えば「唇齒相依元旧誼」⁽²²⁾「兄弟情誼曠千古」⁽²³⁾等々の言葉で述べられていることである。これはまさに植民地支配のレトリックのひとつであったと言えよう。

三 開化の悩み、欧米化と儒学

前章では同文論を中心に、近代東アジアの情勢とこれを取り囲むアジア連帯主義に対して論じた。当時、開港した朝鮮は、日本の開化を鏡にしようとした。なぜなら、日本が、朝鮮の「東道西器」的な開化と、中国の「中体変用」的な開化が追い求めた理想の実現を示した実例と見えたからである。開化の実態を調査するために派遣された朝鮮朝士視察団の報告書には、開化をめぐるいろいろな悩みがよくあらわれている。

最近通西之時。朝議不一。或有攘外不納者。或有開門請納者。及其通西以後。或有政法之悉倣西人者。或有仍守旧制者。謂以開港鎖港之党。開化守旧之論。而互相傾軋持久抵牾。党是時。閔白之餘党。内以倣乱。欧米之強敵外而侵虐。執政幾人。臆決倡起。排衆議挾主威。朝廷之上。是非靡定。野衙之間。議論紛紜。甚至大臣。街路喫劔。不爲改意。仍許通和。頗倣西法。今日改昨日之法。明日改今日之法。所以鎖港守旧之人。更不敢參烈於朝議。而開港開化之徒。超迁官秩爲世顯。用現今或有開悔以一遵西法。自以爲恥。有急進漸進之論而殆若騎虎難下云。是白齊⁽²⁴⁾。

日本の場合も、開化の過程で「開化」と「守旧」の争いがあった。また徳川幕府の反発も強かった。西欧の侵略を目の前に置いて開化をめぐる様々な論争をした末に、開化を始めたが、昨日作った法を今日直して、今日作った法を明日直すの

が、常であった。朝鮮でも「守旧」と「開化」勢力の対峙は激しかった。特に西洋の西学と東洋の儒学のはざままで、開化論者にして漢学者である者の悩みは深くならざるを得なかった。

一八八一年朝鮮朝士視察団のメンバーだった崔成大が三島中洲を訪問し、筆談した内容を中心にこれを調べて見よう。筆談集は『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』で、二松学舎大学21世紀COEプログラムで発刊した『三島中洲研究』vol. 4 (2009) に載せられている。⁽²⁵⁾

一八八一年七月九日崔成大は菊町の三島中洲宅を訪問した。この当時三島中洲は法務省の仕事をやめて、東京大学に出講していた。崔成大は司法視察を担当した巖世永の随員として来日した。彼は一八三四年出生して字は士行、号は雲臯であった。⁽²⁶⁾

「筆談」十五には⁽²⁷⁾、儒学と西洋の近代的技術の関係に対する討論が載せてある。内容は次の如くである。

十五

毅 弟元修儒學者。然多年在法官、讀洋律、又與洋人接、知其長短如道德則周孔不可不奉。但其技術取洋所長。恐公平。貴意如何。

成大 古今天下、安有拋道德尙技術而致治之理乎。寧互濟之則無怪耳。

長顛 評曰、万世不易之論。

毅 然老莊亦自称道德積氏耶蘇亦然。故余以周孔爲真道德。

成大 不能弁似是之非、則何足道哉。

長顛 使周孔在今日則必不唱道德。而真道德在其中。如何。

成大 同我亞細之國尙矣。無論并与西人而入我道德之域。道德弥天地則更有何功利技術之可論乎。



〈朝鮮朝士視察団（1881年）〉

長願 功利技術不可不論。但以道德爲根柢則不陷詐譎。⁽²⁸⁾

上記のなかで、三島中洲は、西洋の長所と短所を把握して技術のみを取り上げるといふ「和魂洋才」を主張した。反面、崔成大は道德（儒学）を捨てて、技術のみを追うことはできないと主張した。すると三島中洲は、老莊及び釈迦、キリストも皆「道德」であったが、本当の道德は儒学であると言った。崔成大も似而非ではない真正な道德を分別するようになれと。さらに西洋の技術を東洋に受け入れたように、儒学の道德も全天地に及ぶようになると述べた。川北梅山は「功利」と「技術」というのが、非常に重要なことであるが、道德（儒学）を根本としていなければ偽りに陥ると考えた。

崔成大は開化と言えども、技術と道德を仕分けすることができないと思って、三島中洲の論理に傾いた疑問を払拭できなかった。しかし、三島中洲はすでに明治維新の技術的發展を日常的に経験したので、崔成大とは違う主張ができた。崔成大は西洋の技術を学ばなければならぬことに対して、よほど懐疑的であった。崔成大のような態度に対して、三島中洲は「養生」の古典的論理で駁した。「筆談」十七は「西器」についての討論である。

十七

毅 聖人代天生養斯民、古帝王製網罟耜耜諸器、皆所以生養之也。西人製器

械爲生養之具、是奉古聖人之遺意。我取之助生養亦聖人之遺意也。

成大 豈其然乎。不其然乎。

成大 先生固戲我蔑裂也。

毅 決非戲言。僕持論如此耳。蓋取長捨短之說也。溫故知新、聖人之教、本來然。

成大 其長其短、固在我之如何取捨、何庸取法於西人乎。在昔嗾世未聞取長於西也。

毅 此論也非今日所尽。待數年再會之後、更尽之。

成大 惟天而已耳。

毅 弊國十數年前議論、皆与先生一致。明治初政、矯枉甚過、遂心醉西制、百事模效之。今則稍悔之。是漢學之所以再興也。於是始有取長捨短之論。

成大 先生衷曲之言、今始得聞。向前所云長短之論、僕豈深信也哉。貴國之稍悔當爲弊邦鑑轍之明証也。

長顛 評曰、是的確之論、不得不左袒。²⁹

三島が西洋の技術で国民の生活を向上させるといふ主張に対して、崔成大は、西洋から技術を学ぶ必要を認めなかった。

三島中洲は、日本も崔成大のような議論を持った人が多かったと言った。明治初期には、西洋一辺倒の開化政策が施されたが、今はそのことを後悔して、漢学が再興されていて、これがちょうど「取長捨短」だと主張した。

三島中洲は技術と道徳（思想）に二元化して、西器の有用性を高く評価したが、崔成大は西洋を拒否する立場を主張していた。彼にとつては、東洋にあるものを捨ておいて、敢えて西洋にあるものを求める理由が納得できなかつた。崔成大の思惟がアジアを対象にして成り立っているのに対し、三島中洲は脱アジア的であつた。その理由は彼らの対西洋觀の相違から来たものであつた。

次に「筆談」二十一を見てみよう。

二十一

毅 苟主忠信、雖洋人与同胞耳。況同種同文同学之國乎。

成大 大抵人之有行、不及於中人以上、則其烏能事々忠信言々篤敬然苟以忠信篤敬爲心。其離不遠復之有期。可不貴哉。至如西人是一種異類、不欲聞之。斯文不埋、則天將有徇鐸之日也。

毅 西人固与東人異種。然自天視之。均是人耳、古人所以有一視同仁之言。

成大 桀犬吠堯堯可吠之者乎。

長顛 一視同仁。豈有堯舜之別乎。

成大 有毅則稗亦有之。

長顛 毅則養之。稗則除之。只在方略如何而已。

成大 所以天將徇鐸之耳。

長顛 桀犬私其主耳。非公平之論。故有一視同仁之說。愚說不滿。高意慙謝々々

成大 莫非是野人高談。請扯丙之。

毅 無敵国外患者。國必忘。今有洋夷猖獗于外。無乃我亞細亞之幸乎。

成大 誠然高論也。

成大 惟修攘是凶而已。⁽³⁰⁾

三島中洲は、「一視同仁」⁽³¹⁾的な考え方で、西洋人も教化が可能であり、もし「忠臣」という道德に感化された西洋人がい

たら、彼らも自分たちと同胞になれると述べた。崔成大は「同種同文」なら可能なことだが、「異類」である西洋人に限っては、とうてい不可能なことである。そのうえに、もし儒学が湮滅することがなければ、いつか、きっと孔子のような人がまた現われて儒学を再興すると期待した。

三島中洲と崔成大は、文明開化において西洋の技術の役割に対する見方において衝突したが、開化の時、同教すなわち儒学を根本にしなければならぬという点では共鳴した。彼らは朝鮮と日本とで各々土台を異にしていたが、西欧一辺倒の開化に反対していた。なおまた、儒学をアジア的価値として想定して、開化を根底において把握した観点は同じであった。彼らは長い間漢文教育を受けた結果、儒学的な世界観が身に付いていて、漢文の読み書きに自由な存在だったからである。彼らが学んで信捧し、語っている「斯道」＝「儒学」に対しては具体的な言及がなかったので、推測しかできないのでこれに對しては言及を省きたい。ただ、両方とも双方の差より「儒学国」という亜細亜共通の土台に着目したとみえる。

その結果、彼らの討論の結論は、アジアの当面課題は「修攘」というところにあるということである。「内修外攘」は国内的には政治と儒学を修めて国を堅固にし、国外的には、外国の侵略を食い止めるということであった。

四 日本の文化に対する再認識

近代初頭、朝鮮は修信使及び朝士視察団を派遣して、日本を調査し、そのような過程を経て日本に対する具体的な知識を得ていた。朝鮮通信使が派遣された時の朝鮮は、日本を野蛮国という蔑視的な視線で見ている、文化に対しても評価する価値さえないと卑しめていた。ところが、江華島条約以後来日した朝鮮の外交団は、日本に対するこのような態度を改めるほかなかった。返って自分たちが卑下の対象になるとか、笑い物になっていることを悟るようになった。³²朝鮮の「小中華」としての自負心は崩壊する一方で、日本は眩しいくらいの文明発展を誇っていた。

このような状況下で朝・日間には、相互の文化に対する新しい評価が生まれた。本章では三島中洲と森槐南を例に挙げて明らかにしよう。

三島中洲は前章の「筆談」で見たとおり、自分を「儒学者」として認識し、朝鮮人も彼を「儒学者」として受け入れていった。一九〇八年に申箕善は「寄日本三島侍講」を『大東学会月報』2号に、この詩に和韻して「和呈申副將」を同じ雑誌に掲載した⁽³³⁾。申箕善の「寄日本三島侍講」には、儒学者である三島中洲に対する敬意が表されていた。

三島は崔成大とは直接に会って自分の詩と著作に話し合ったが、申箕善の場合は三島の著作を読んで「儒学者」という評価をしたことだ。申箕善のように三島の著作を読んだ記録は、金允植にもあった。金允植が徳富蘇峰に送った手紙には三島中洲の文集を読んだことが記されていた⁽³⁴⁾。朝鮮人は三島中洲を儒学者として認識し、そのため日本の儒学に興味を持ち、その底力に注目したと思われる。

次は漢詩人としての森槐南に関して述べる。朝鮮の漢学者が森槐南と初めて知り合ったのは、森槐南の記録によると、一九〇八年である。彼は一九〇八年七月二九日、金允植と出会って以後、八月二九日まで酒宴に参加して、数々の詩をやりとりした。『槐南集』によると、金允植のほか鄭丙朝もこの酒宴には一緒だった。金允植の『東槎謾吟』をみると、この日の前に、彼との出会いがあったことを知ることができる⁽³⁵⁾。

そして一九〇九年四月に、朝鮮人観光団が日本に来た時、森槐南は芝城山館の宴会に参加して朝鮮人との交流を行った。その時に酬唱した漢詩は『善鄰唱和』1（一九〇九・六、秀英舎）に残っている。

また、七月には彼は伊藤博文に随行して、朝鮮と満州を歴訪するため、朝鮮の地を踏むことになった。森槐南の『浩蕩詩程』（鷗夢吟社、一九〇九）と『槐南集』、『大東学会月報』に朝鮮人との出会いが記されている。彼はその時、鄭万朝・呂圭亨・鄭丙朝・金沢榮と会って、金允植とは再会をした。

彼はハルビンで伊藤博文が安重根に狙撃を受けたとき、彼も銃傷を負って、それが原因で死亡した。かれは随鷗詩社を主



森槐南（一八六三年二月二十六日—一九一一年三月七日）は、名古屋で生まれた。父は森春濤で、名古屋藩の儒学者であり、母は女流歌人である森清子であった。彼の名は公泰、字は大來であり、通稱は泰二郎（泰次郎）である。別号に秋波禪侶・菊如澹人である。鷺津教堂、三島中洲、清人 金嘉穂などに修学しており、彼の父親に漢詩を学んだ。そして父の勧めで、外国語学校に入学をしたが、外国語ではなく、漢詩文や中国俗文学を読むのが好きだった。一八歳のとき、太政官に出仕した後、枢密院属、帝室制度取調局秘書、図書寮編集官式部官などを歴任し、帝国大学文科大学講師に委嘱された。

(36)

宰し、明治漢文学において中心的存在であった一方、『紅樓夢』を日本語に翻訳して日本の紅学の基礎を築いた。⁽³⁷⁾

また彼は森春濤を引き継いで清詩を追求したが、父である森春濤が「神韻」を重視したこと比べて、「性霊」を重視した。しかし、彼らは共に濃艶な色彩が著しいと評価されて明治中後期に、詩壇の主流になったと言われる。⁽³⁸⁾

以上のように、森槐南は明治時代の有名な詩人であり、官吏を兼ねて活動した人物であった。彼の様々な面の中で朝鮮人にとっては特に詩人として認識されていたようである。金沢栄が一九〇九年七月、森槐南に送った「用春畝太師韻贈森槐南」を見てみよう。

清詞字字響琅然。塵裏真驚蛻骨仙。

誰識成連千載後。希音遺在海東辺。⁽³⁹⁾

特に、金沢栄は中国に亡命し抗日運動をした人物で、彼の漢詩こそ当時の森槐南に対する朝鮮側の普遍的な見方を見せて

くれる資料だと思われる。

一九〇九年七月、森槐南は枢密院議長であった伊藤博文に随行して朝鮮を訪問したが、金沢栄は彼の漢詩に対して、上記の詩のように評価した。そして『韶漫堂文集』の「雑言」では、森槐南の詩の水準が、朝鮮・中国と比べても劣らないと述べた。

宇宙間声調之同。猶人性之同。泰西之詩。吾不知已。如日本之詩之工者。其声律之諧。未異於中国朝鮮。吾見森槐南之詩而知其然耳。⁽⁴⁰⁾

金沢栄を始め、森槐南に対するこのような評価は、日本の文学（文明）を朝鮮・中国に比べて劣等だという伝統的な認識から脱したものだ。朝鮮と中国及び日本の文学（漢詩）の水準を同等だと認めたのである。このように彼は森槐南を通じて日本の文学を再評価したのである。

詩人という視点からの森槐南に対する評価は、彼の輓詩においても著しかった。『毎日新報』に異例的に6日間にかけて朝鮮人が森槐南を追悼する輓詩が載せられた。

輓詩の中で彼に対する朝鮮人の評価をさらに見てみよう。次頁の〈表一〉の輓詩をみると森槐南は「詞林宗匠」⁽⁴¹⁾、「滄海詩人」⁽⁴²⁾、「八斗文章」⁽⁴³⁾と呼ばれて、「優れる詩人」として高く評価された。しかしこのような評価はたして客観的であろうか。あるいは日本の官僚なので、過大に評価されたのであろうか。

彼の漢詩は父の友人であった金嘉穂に中国語を習ったことに基づいている。そのため彼は漢詩を中国語の発音どおり読め、戯曲など日本人が理解しにくい中国文学に対しても詳細に理解していた。当時の知識人たちより漢詩の声律に明るかったし、また文学的水準が高かったので朝鮮人により彼の詩は高く評価されたのだと考えられる。⁽⁴⁴⁾

番号	作家	題目	出典
1	李完用	槐南先生森博士輓章	毎日新報 1911. 3.28
2	朴斉純	二	毎日新報 1911. 3.28
3	趙重応	三	毎日新報 1911. 3.28
4	高永喜	槐南先生森博士輓章	毎日新報 1911. 3.29
5	任善準	同	毎日新報 1911. 3.29
6	朴箕陽	同	毎日新報 1911. 3.29
7	兪吉濬	同	毎日新報 1911. 3.29
8	朴斉純	同	毎日新報 1911. 3.29
9	趙民熙	槐南先生森博士輓章	毎日新報 1911. 3.30
10	金有濟	同	毎日新報 1911. 3.30
11	久芳直介	同	毎日新報 1911. 3.30
12	李正在	槐南先生森博士輓章	毎日新報 1911. 3.31
13	成夏国	同	毎日新報 1911. 3.31
14	具羲書	同	毎日新報 1911. 3.31
15	鄭万朝	槐南先生森博士輓章	毎日新報 1911. 4. 1
16	呂圭亨	槐南先生森博士輓章	毎日新報 1911. 4. 2

〈表1〉⁴¹

それゆえ森槐南に対する高い評価の裏面には、当時統監府官僚あるいは日本人との酬唱の折には、漢詩文はかろうじて意思疎通の書き言葉に過ぎなかったのと比べて、森槐南に出会ってはじめて、所謂「文学的交流」ができるようになったのであると思われる。例えば、金沢栄は彼に「詩酒」を一緒にすることを勧めた後「会向滄溟碧酒。与君同唱浪淘沙」と言ったことにも明らかである。

かりに韓半島を取り巻いていた情勢が悪くなかったら、あるいは日本が朝鮮を侵略するというようなことがなかったら、金沢栄が詠んだように二人は友情を交わしながら、悠悠自適の幽默を満喫することができたかもしれない。

朝鮮漢学者と日本人が楽しんだ「宴会」という空間は、非常に政治的な空間ではあったが、金沢栄のように政治と文学を分離させようとした人は多かった。彼らは宴会を朝鮮と日本間の交流の場と認識して、漢詩を取り交わした。彼らの目には、この空間に一緒にいた日本人は、征服者あるいは支配者という政治的人物ではなく、どこまでもただの詩人であった。宴会で朝鮮と日本の詩人たちは詩で話し合い、詩でお互いを評価したのである。

しかし、彼らがこの空間を私的な空間として想像しても、実際にはイデオロギーの磁場の中にあつたので、そこから脱することはできなかつた。すなわち芝城山館と翠雲亭などで行つた宴会は政治的な意図の下に開かれたのであり、森槐南は詩人であるよりも日本帝国の臣民であつた。⁽⁴⁶⁾にもかかわらず、朝鮮漢学者にとっては、同文同教の東アジア人であり兄弟であつたのである。

五 おわりに

本研究は、朝鮮と日本の漢学者が互いに交流して影響を与え、また受けたことに関する研究であり、彼らの朝鮮と日本との近代をめぐる様々な言説を明らかにしたものである。

第一章では、近代東アジアを理解するキーワードとしての「同文論」を考察した。東アジアの書き言葉として、漢字の位置と役割は「同文論」ということによく現われている。「同文」では久しく朝・中・日が漢字を媒介として共同体意識が生まれている。しかし近代期の「同文論」は、中国から日本に発話者が変わった点で、伝統的な「同文論」とは異なつたのである。近代以前までは、中華主義に根ざした中国発「同文論」が東アジアを占めていたが、近代には日本の膨脹政策に根ざした日本発「同文論」に変わってきた。日本発「同文論」によると、東アジアは、儒教という思想の共同体により日本を中心に連帯して、西洋の侵略に対抗しなければならなかつた。しかし、日本のアジア植民政策が実施された1908年に朝鮮人には、日本との関係は「同文国」・「善隣国」から、「兄弟国」と認識するほどに変わつていった。

第二章では、文明開化をめぐる朝・日漢学者の見方がどうであつたかを明らかにした。朝・日漢学者の間では、文明開化において西洋の技術の役割に対する見方が衝突した。三島中洲を始め、日本の漢学者は西洋の技術を導入して国民の生活を養うことを主張したが、朝鮮側は、技術と倫理が分けられないという点をあげて西洋の文明移入に対して警戒を厳重にし

た。そのためそのような恐れは西洋の技術導入を拒否することに繋がった。しかし、開化の時、同教すなわち儒学を根本にしなければならぬという点では互いに共鳴した。彼らは朝鮮と日本とで各々土台を異にしていたが、「脱亜入欧」のような西欧一辺倒の開化に反対したことは同一であった。特に、彼らの考えるアジアの当面課題が「修攘」という点においては。

第三章では、朝・日の関係が変化したことに伴った多様な動きのなかで、交互の「認識」が切り替わった点について解明した。朝鮮は修信使及び朝士視察団を派遣して、日本を調査し、そのような過程を経て日本に対する具体的な知識を得ていった。眩しいばかりの文明を誇っていた日本と出会った朝鮮は、「小中華」としての自負心が崩壊させられはじめた。このような状況で朝・日間には、相互の文化に対する新しい評価が生まれた。朝鮮人にとって、三島中洲という巨儒と森槐南という偉大な詩人の発見は、このような脈絡を通して理解が可能である。

朝鮮の近代化に関する研究では朝・日を中心にした研究が多い。そのなかで、本研究は近代期における「漢学者」の役割を明らかにした。東アジアの近代に「漢学者」は、守旧的で反近代的な存在として想定されたりした。あるいは漢学者より「漢字」書き言葉」だけが、研究上、話題の焦点となった。

このような理由から、近代期漢学者の役割に対しては、とくに心を引かれることは少なかったようである。しかし、東アジアの知識人である漢学者が発話した近代の言説は、漢字という伝達装置によって急速に波及した。東アジアという世界の近代化の中で一部分ではあっても相互に影響を与え合った諸国の漢学者の出会いには、実は彼ら自身の変化はいうまでもなく、自国にも変化を引き起こしたと言えよう。

註

- (1) 村山吉広、『漢学者はいかにいきたか』、大修館書店、一九九九、三一七頁。
- (2) 『中庸』、く天下下車同軌。書同文行同倫。
- (3) 三島中洲著 石川忠久編、『送嚴世永崔成大婦朝鮮』、『三島中洲詩全釈』第2巻、二松学舎、二〇一〇、四六四―四六五頁。
- (4) 三島中洲にごいはは <http://ja.wikipedia.org/> で検索、彼の写真は <http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/jimmeiroku/mishima-chuushu u/mishim a-chushuuh.htm> で検索した。
- (5) 金允植、『次韻奉和三島侍講』、『金允植全集』1、亜世亜文化社、一九八〇、三九五頁。
- (6) 金允植と彼の写真にごいはは <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%91%E5%85%81%E6%A4%8D> で検索した。
- (7) 三島中洲著 石川忠久編『八月二十九日暖依村莊宴集席上賦贈朝鮮修信使金宏集』、『三島中洲詩全釈』第1巻、二松学舎、二〇〇七、六五六―六五七頁。
- (8) 三島中洲著 石川忠久編、『步朝鮮金星使嘉鎮號東農韻寄題其澄亞亭意謂澄清亞細亞故及』、『三島中洲詩全釈』第2巻、二松学舎、二〇一〇、四三五頁。
澄亞名亭子。寓言微意明。紅塵四隣暗。碧水一池清。奉使在他国。思君望旧京。東洋波浪穩。長喜徹邊營。
- (9) 『東京日日』六月二五日、狐塚裕子の「一八八一年朝鮮朝士視察団の来日」(二)『清泉女子大学紀要』57、清泉女子大学、二〇〇九、四頁) から再引用。
- (10) 姜璋、「代申大官上桓齋朴相国珪寿」、『古歡堂収草文稿』巻之三補遺、韓国古典翻訳院 <http://db.ric.or.kr/> で検索した。
- (11) 姜璋、「代申大官上桓齋朴相国珪寿」、『古歡堂収草文稿』巻之三補遺、韓国古典翻訳院 <http://db.ric.or.kr/> で検索した。
- (12) 朴暎美、『日帝強占初期漢学知識人の文明觀と対日認識』、檀国大学校博士学位論文、二〇〇六、参照。
- (13) 黒木彬文・鱗澤彰夫解説、『興亞會報告(復刻板)』、不二出版、一九九三、一二八―一三五―一五六頁。
- (14) 末松謙澄と彼の写真は <http://ja.wikipedia.org/> で検索した。
- (15) 末松謙澄、「贈韓人高永周氏時爲江華留守裨將」、『青萍集』巻3、隨陽吟社、一九三二。
把筆共談天下事。好問忘恥吐心腸。：兩國尋盟今將成。實是交鄰第一策。
- (16) 『善隣唱和』1、秀英舎、一九〇八。
- (17) 『善隣唱和』2、秀英舎、一九〇八。
- (18) 『納涼唱和集』、秀英舎、一九〇八。
- (19) 『輕妙唱和集』、秀英舎、一九〇八。
- (20) 鄭万朝、「與諸同行赴末松青萍(謙澄)家招宴主人先題索和(末松能詩爲日本翰墨風流主人是日東京文人画家皆会)」、『茂亭存稿』巻之五。

- (21) 末松謙澄編、「借韻和青萍」、『善隣唱和』、一九〇九、秀英舎。
 大火西流瀨氣橫。三韓使者上歸程。觀光応思資開化。調鼎那忘補聖明。
- (22) 鄭万朝、「芝城山館雅集次主人原唱韻」、『善隣唱和』1、一九〇八、秀英舎、四頁。
- (23) 李承旭、「芝城山館雅集次主人原唱韻」、『善隣唱和』1、一九〇八、秀英舎、六頁。
- (24) 許東賢編、『朝士視察団関係資料集』12、日本国聞見条件、国学資料館、二〇〇〇、一七四頁。
- (25) 『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』、『三島中洲研究』vol. 4、二松学舎大学21世紀COEプログラム、二〇〇九。
- (26) 李憶永、『日槎集略』、韓国古典翻訳院 <http://db.ikc.or.kr> で検索した。
- (27) 段落の数字は『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』に従って日本語翻訳を参考した。ただ「筆談」という表題は私意で付けた。
- (28) 『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』15、七七―七八頁。
- (29) 『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』17、七九頁。
- (30) 『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』21、八三―八四頁。
- (31) 一視同仁は韓愈の「原人」からでて、すべての人を差別なく平等に愛することをいう。
- (32) 陶徳民、『明治の漢学者と中国』、関西大学出版社、二〇〇七、二四頁。
- (33) 申箕善、「寄日本三島侍講」、『大東学会月報』2号、大東学会、一九〇八、三、五〇頁。三島中洲、「和呈申副将」、『大東学会月報』2号、大東学会、一九〇八、三、五二頁。
- (34) 金允植、「与末松子爵」、『雲養集』続集卷3。五九五頁。
- (35) 金允植は『中州集』、『独抱樓詩文』、『秋聲窓詩鈔』、『藤島餘芳』、『韓村先生遺稿』、『北陸游草』、『梯雲取月集』、『碧堂絶句』を順番に手に入れて読んだことがあったそうである。
- (36) 金允植、『金允植全集』1、亜細亜文化社、一九八〇、三七―三九六頁。韓国古典翻訳院 <http://db.ikc.or.kr> で検索した。
- (37) 森槐南の写真は <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai95/bnk/kainan.html> で検索した。彼に対する情報は溝部良恵の「森槐南の中国小説史研究について」(『中国研究(TheHihyoshireviewofChinesestudies)』No.1、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、二〇〇八、三、三三―六七頁)を参照した。
- (38) 溝部良恵、上掲書。
- (39) 猪口篤志著 沈慶浩外訳、『日本漢文学史』、ソミョン出版、二〇〇〇、七三二頁。
- (40) ホクアンス(호광순)、「滄江金沢采の亡命漢詩に表された状況性」、『中国人文科学』32、中国人文学会、二〇〇六、六、二二〇頁。
- (41) 金沢采、「雜言」9、『韶漫堂文集』巻8。三四七頁。韓国古典翻訳院 <http://db.ikc.or.kr> で検索した。
- (42) 朴映美、「森槐南によって見た愛国啓蒙期知識人の対日認識」、『漢文学論集』33、権域漢文学、二〇一一、一八一―二〇二頁。表及び内容はこの論文を参照した。

(42) 朴箕陽、「槐南先生森博士輓章」

詞林宗匠仰槐翁。四海詩名百世風。天不假年今忽去。東溟一夜捲文虹。

(43) 兪古濬、「槐南先生森博士輓章」

滄溟詩人森大來。李仙杜聖共徘徊。一朝駕鶴歸天上。浩蕩余風万里哀。

(44) 趙民熙、「槐南先生森博士輓章」

八斗文章世共欽。十年交誼我偏心。哀詞遠和山陽曲。赤阪青山何処尋。

(45) 溝部良恵、「森槐南の中国小説史研究について」、『中国研究 (TheHihyoshireviewofChinesestudies)』No.1、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会(二〇〇八。3)、三三―六七頁。

(46) 次の漢詩は森槐南が伊藤博文に随行し、朝鮮を訪ねた途中に書いたもので日本帝国の臣民としての使命感がよく見える。『毎日新報』に載せた輓詩、徳富蘇峰の「森槐南逝く」をみてみよう。

極望鷄林霧半披。布帆不動鳥飛遲。未知風色何時變。漫託巖形当面奇。国弱誰扶傾厦急。海平全忘倒瀾危。群山万壑空屏障。眼看九天雲下垂。

△参考文献▽

『善隣唱和』1、秀英舎、一九〇八、

『善隣唱和』2、秀英舎、一九〇八、

『納涼唱和集』、秀英舎、一九〇八、

『輕妙唱和集』、秀英舎、一九〇八、

『大東学会月報』、大東学会、一九〇八。

金沢栄、『韶漢堂集』、韓国文集総刊 三四七。

金允植、『金允植全集』、亜細亞文化社、一九八〇。

——、『雲養集』、韓国文集総刊 三二八。

姜璋、『古歡堂収草文稿』、韓国文集総刊 三二五。

李憶永、『日槎集略』、韓国古典翻訳院。

三島中洲、『中洲文稿』、二松学舎、一九一七。

——、『中洲詩稿』、二松学舎、一九九二。

末松謙澄、『青萍集』、隨鷗吟社、一九二三。

森槐南、『浩蕩詩程』、鷗夢吟社、一九〇九。

- 、『槐南集』、文芸堂書店、一九二一。
- 許東賢編、『朝士視察団関係資料集』12、日本国聞見条件、国学資料館、二〇〇〇。
- 『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』、『三島中洲研究』vol.4、二松学舎大学21世紀COEプログラム、二〇〇九。
- 三島中洲〔著〕、石川忠久編、『三島中洲詩全釈』第1巻、二松学舎、二〇〇七。
- 三島中洲〔著〕、石川忠久編、『三島中洲詩全釈』第2巻、二松学舎、二〇一〇。
- 山口角鷹編、『三島中洲・二松学舎の創立者』、二松学舎、一九七七。
- 三島正明、『最後の儒者・三島中洲』、明德出版社、一九九八。村山吉広、『漢学者はいかにいきたか』、大修館書店、一九九九。
- 猪口篤志著 沈慶浩外訳、『日本漢文学史』、ソミオン出版、二〇〇〇。
- 陶徳民、『明治の漢学者と中国』、関西大学出版社、二〇〇七。
- 三浦 叶、『明治の漢学』、汲古書院、一九九八。
- 、『明治漢文学史』、汲古書院、一九九八。
- 町田三郎、『明治の漢学者たち』、研文出版、一九九八。
- 、『明治の青春』、研文出版、二〇〇九。
- 朴暎美、『日帝強占初期漢學知識人の文明觀と対日認識』、檀国大学校博士學位論文、二〇〇六。
- ホクアンス(호곡안스)、『滄江金沢栄の亡命漢詩に表された状況性』、『中国人文学』32、中国人文学会、二〇〇六。
- 溝部良恵、『森槐南の中國小説史研究について』、『中国研究(TheHyoShireviewofChinesestudies)』No.1、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、二〇〇八。
- 狐塚裕子、『一八八一年朝鮮朝士視察団(紳士遊覽団)の来日(1) 外務省の対応を中心に』、『清泉女子大学紀要』56、二〇〇八。
- 、『一八八一年朝鮮朝士視察団の来日(2)』、『清泉女子大学紀要』57、清泉女子大学、二〇〇九。
- 、『一八八一年朝鮮朝士視察団(紳士遊覽団)の釜山集結と新聞報道』、『清泉女子大学人文科学研究所紀要』29、二〇〇八。
- 、『一八八一年朝鮮朝士視察団(紳士遊覽団)の日本派遣—日本側から見た派遣経緯』、『清泉女子大学紀要』51、二〇〇三。
- 『三島中洲研究』…二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」…研究成果報告vol.1、二松学舎大学二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局、二〇〇六。
- 『三島中洲研究』…二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」…研究成果報告vol.2、近世近代日本漢文班編二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局、二〇〇七。
- 『三島中洲研究』…二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」…研究成果報告vol.3、近世近代日本漢文班編二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局、二〇〇八。
- 『三島中洲研究』…二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」…研究成果報告vol.4、近世近代日本漢文班編

二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局、二〇〇九。
『三島中洲研究』…二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」…研究成果報告<2>、二松学舎大学二松学舎
大学21世紀COEプログラム事務局、二〇一〇。

付記

本研究は日韓基金第10031号の支援によって行われました。

【キーワード】

・ 同文論 ・ アジア連帯主義 ・ 開化 ・ 儒学 ・ アジアのアイデンティティ